

英語指導者に求められる資質・能力の具体化を目指して — 小学校教員と中学校英語科教員へのアンケート調査から —

山口大学 猫田 和明

This paper presents the results of a questionnaire survey exploring various aspects of competence in teaching English in elementary school and junior high school. The results show that both teachers in elementary and junior high school recognize the importance of creating supportive classroom for learners' oral communication. Junior high school teachers tend to put more emphasis on the knowledge of teaching methodology, language proficiency (including reading and writing), and an ability to provide proper assessment. Elementary school teachers, in contrast, think a great deal of flexibility in teaching with "English Notebook" (songs, chants, and games) in order to maximize pupils' motivation. In addition, they are stressing the importance of collaboration between and among teachers and native speakers.

1. 背景と目的

近年、欧米においては、教員養成・研修プログラムの充実と教員の質的水準の確保を目的として、英語（外国語）を教える指導者の資質・能力を具体化しようとする動きが活発である。これをリスト化したものとしては、ACTFL (2002), Kelly & Grenfell (2004), Newby et al. (2007), Graaff (2008) などがある。このうち Newby et al. (2007) は 193 項目に及ぶ Can-do statement に基づいたポートフォリオを作成することにより、内省ツールとしてリストを活用することを提案している。日本においても、教職課程における「教職実践演習」（平成 22 年度以降の入学生を対象に、平成 25 年度から開講する新科目）の導入に伴い、教員の資質・能力を明示的に確認することの要求が高まっている。また、外国語教育の分野においては、平成 23 年度からの小学校外国語活動の全面実施に伴って、小学校を含めた英語指導者の資質論議（例えば小林（2006）など）が活発になってきている。本稿では、小学校教員と中学校英語科教員へのアンケート調査をもとに、両者の持っている目指すべき英語指導者像の違いを浮き彫りにし、教員養成・研修プログラムの開発や講義・演習で活用できる内省ツールの開発に資するための基礎資料を提供することを目的とする。

2. 調査方法

(1) アンケートの作成

日本においては英語指導者の資質・能力について体系的に論じた文献が少ない。金谷（1995:17-25）は、「英語運用能力」、「知識」、「指導力」、「人格・性格」という 4 分類を用いて説明しており、バトラー（2005:176）も、細かな差異はあるものの、この枠組みを受け継ぐ形で次

のように整理している。

- ・ 言語運用能力ベースの資質（当該言語の知識、言語知識を運用する能力など）
- ・ 知識ベースの資質（言語習得理論の知識、言語学の知識、当該言語の社会・文化に関する知識、生徒に関する知識など）
- ・ 指導ベースの資質（さまざまな指導テクニック、テクノロジーを使うスキル、教室運営能力など）
- ・ 個人・対人関係ベースの資質（親しみやすい性格、柔軟性、協調性、ユーモア感覚など）

筆者は、本研究から得られた結果を最終的には英語科教育法や小学校外国語活動の指導法に関する科目の授業改善につなげることを想定しているため、特に指導ベースの資質の内容を詳しく書き出すことに重点を置いた。しかし、指導ベースの資質はそれ単独で存在するものではなく、他の資質と密接に関わって総合的に「授業力」へとつながるものであるという考えに立って、教員一般に求められると考えられる資質・能力も排除せず、できるだけ網羅的に項目を書き出すことに留意した。また、文献から整理した項目だけでは教育現場で実際に必要と考えられている資質・能力との隔たりが生じる可能性があるため、次のような手順で質問紙を作成した。

1. 先行研究（ACTFL, 2002; Kelly & Grenfell, 2004; Newby et al., 2007; Graaff, 2008; 金谷, 1995; バトラー, 2005; 小林, 2006）を参考に原案を作成した。
2. 英語活動を継続的に実践している小学校教員と中学校英語科教員数名に面接を実施し、指導者に必要な資質・能力について考えられる限りの項目をあげてもらおうよう依頼した。
3. 面接によって収集された項目内容が、原案に含まれていることを確認した。
4. 面接を行った教員数名に試行的にアンケートに回答してもらい、理解できない項目がなかったかどうか、回答直後に筆者が口頭で質問して確認した。
5. 2～4の結果を踏まえて原案を修正し、75項目からなるアンケート調査票を作成した。

(2) 調査の実施

各項目の資質・能力の重要度について、1（極めて重要である）、2（重要である）、3（どちらかといえば重要である）、4（どちらかといえば重要ではない）、5（重要ではない）、6（全く重要ではない）の6段階で回答を依頼した。2009年3月、事前にアンケート調査への協力を依頼し、承諾を得てからアンケート用紙を郵送した。その結果、山口県内の中学校10校から英語科教員36名、英語活動等国際理解活動推進事業拠点校である小学校5校から英語活動の実践経験を持つ教員50名（うち英語免許保持者6名）の回答を得た。回答者の属性は表1～表4の通りである。

表1 勤務年数（中学校）

5年未満	2
5年以上10年未満	7
10年以上15年未満	9
15年以上20年未満	6
20年以上	12
計	36

表2 クラスサイズ（中学校）

20名未満	7
20名以上30名未満	9
30名以上40名未満	20
計	36

表3 英語活動を行なった時間
(平成19・20年度の合計)(小学校)

10時間未満	10
10時間以上20時間未満	9
20時間以上30時間未満	3
30時間以上40時間未満	11
40時間以上50時間未満	8
50時間以上	5
不明	4
計	50

表4 学校の規模(平成20年度)(小学校)

	学級数	定数	児童数	回収数
A小	8	13	71	9
B小	26	35	712	18
C小	17	28	433	10
D小	7	12	85	6
E小	8	13	115	7
計				50

*平成19年度にのみ英語活動を担当した教員も含んでいるため、学級数より回収数が多い場合がある。

3. 調査結果

小学校教員と中学校英語科教員の回答について、各項目の平均値を求め、*t*検定を用いて分析した。その結果、75項目中53項目に有意差(5%水準)が認められ、うち51項目については中学校英語科教員の方が、2項目については小学校教員の方が重要度が高いと判断していた。多くの項目について標準偏差は小学校の方が大きく(次頁以降の表5～表8を参照)、重要度の判断に比較的ばらつきがみられた。このことは、小学校における外国語活動を行う上で必要な資質・能力については、小学校教員の間で、まだ共通理解が得られていない可能性があることを示唆している。また、今回検出された有意差は、あくまでもその項目に対して中学校英語科教員の方が小学校教員よりも重視する度合いが強いということのみを意味しており、これらの51項目が小学校の外国語活動には不要であるということの意味しない。そのため、小・中学校間の有意差のみに注目して結果を考察することは誤った解釈につながる恐れがあると判断した。そこで、小学校と中学校からの回答それぞれについて、75項目の順位(平均値が小さい順、すなわち重要度が高い順に並べたもの)の情報を組み合わせることで、データを次のようにパターン化した。

データの類型と分類の規準

(*「平均値」とは重要度に関する6段階の回答の数値を平均したものを指す。)

パターンA 小学校・中学校に共通して重視されている項目(8項目)

規準: 小学校・中学校に共通して順位が上位20位以内の項目

パターンB 特に中学校で重視されている項目(12項目)

規準: 平均値に有意な差があり、かつ、中学校でのみ順位が上位20位以内の項目

パターンC 特に小学校で重視されている項目(2項目)

規準: 平均値に有意な差がある項目

パターンD 小学校で相対的に重視されている項目(9項目)

規準: 平均値に有意な差がなく、かつ、小学校でのみ順位が上位20位以内の項目

3.1 小学校・中学校に共通して重視されている項目

パターンA(小・中ともに重視)に分類された項目は表5の通りである。(項目はキーワードのみを示している。項目の詳細は付録を参照。)

表5 パターンA（小・中ともに重視）に分類された項目

項目 ()は項目番号	小学校 (n=50)		中学校 (n=36)		t	p	小学校 順位	中学校 順位
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差				
(9) 英語を聞く・話す力	1.840	0.738	1.194	0.467	4.956	.000	9	1
(20) 聞くこと・話すことの指導	2.040	0.755	1.444	0.607	3.909	.000	20	8
(32) ウォームアップ	1.700	0.789	1.583	0.604	0.744	.459	1	19
(34) コミュニケーション活動	1.960	0.880	1.500	0.609	2.703	.008	16	14
(41) 動機づけ	1.820	0.774	1.361	0.487	3.366	.001	8	2
(42) 支援的な教室の雰囲気作り	1.760	0.744	1.444	0.504	2.205	.030	4	5
(45) 指導案の柔軟な運用	1.900	0.707	1.556	0.607	2.362	.020	11	17
(72) 人間関係づくり	1.800	0.606	1.500	0.561	2.336	.022	6	13

全体的にみると、小学校と中学校に共通して重視されている項目の特徴は、音声面を中心とした教室でのコミュニケーション活動を支援・促進すること、及びそのために必要な（主に情動的な）環境づくりをすることであるとまとめることができる。

まず、音声面の技能と指導力については、小学校の外国語活動で英語の音声に慣れ親んだ児童を中学校が受け入れることになるため、両者に共通して重要な項目となった。特に中学校では教員の「聞く・話す力」の順位が1位という結果であった。スキルの育成を目標に含む中学校においては、教員が指導する技能について十分な運用能力を身につけておくことの重要性が認識されている。

「ウォームアップ」は、英語活動および英語学習の雰囲気づくりのために行われることが多いが、特に小学校では順位が1位となっており、その重要性が強調されている。楽しみながら英語に慣れ親しませることを重視している小学校では英語を使って活動するための雰囲気づくりの重要度が特に高いようである。

教室において「コミュニケーション活動」を提供することは機械的な練習に偏らないために重要な視点であり、この視点の必要性は小・中学校の両方で認識されている。小学校では体験的な活動という観点から、中学校では活動を通して運用能力を高めるという観点から、コミュニケーション活動の重要性が認識されている。

日本の英語教育を取り巻く環境を踏まえると、「動機づけ」、「支援的な教室の雰囲気づくり」、「人間関係づくり」という視点は重要な項目である。授業以外で英語を使用する場面に乏しい環境では、英語を学ぶことへの関心と意欲が育ちにくい。また、集団の中で目立つことを避ける傾向が強い思春期の子どもたちが、間違いを恐れず、積極的に英語を使えるようにするためには必要な環境を整えなければならない。また同時に、生徒の実態に敏感であることが求められるであろう。「指導案の柔軟な運用」も、このような環境の中で生徒の学習意欲を高めていくためには不可欠な能力であると考えられる。

3.2 特に中学校で重視されている項目

パターンB（特に中学校で重視）に分類された項目は表6の通りである。

表 6 パターン B (特に中学校で重視) に分類された項目

項目 () は項目番号	小学校 (n=50)		中学校 (n=36)		t	p	小学校 順位	中学校 順位
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差				
(3) 言語学・英語学	2.420	0.928	1.444	0.607	5.889	.000	49	7
(5) 英語科教育法	2.120	0.849	1.528	0.609	3.575	.001	32	15
(10) 英語の発音	2.340	0.798	1.389	0.549	6.545	.000	45	3
(11) 英語を読む・書く力	2.460	0.952	1.444	0.558	6.207	.000	51	6
(21) 読むこと・書くことの指導	2.840	1.017	1.444	0.607	7.935	.000	66	9
(22) 4技能の統合	2.460	0.885	1.528	0.654	5.349	.000	50	16
(33) 新出事項の導入	2.160	0.934	1.417	0.554	4.262	.000	36	4
(36) 繰り返し・ドリル活動	3.040	0.968	1.472	0.609	8.566	.000	70	11
(40) 学習規律	2.300	0.909	1.472	0.560	5.211	.000	42	10
(43) 学習目標の意識化	2.140	0.729	1.583	0.554	3.849	.000	33	18
(62) 即時的フィードバック	2.120	0.746	1.472	0.609	4.281	.000	30	12
(63) 授業中のみとり	2.160	0.738	1.583	0.604	3.849	.000	35	20

中学校において重視されている項目には、英語や教授法の知識、読み・書き能力及びその指導力、学習内容の定着及びその評価方法に関するものがあがっている。平成 24 年度から全面実施される中学校学習指導要領では、4 技能を総合的に育成することが強調されている。例えば、スキットを聞いて情報をメモし、それを見ながら内容を人に伝える活動や、ストーリーを読んでそのストーリーの続きを書いて発表するなどの活動を授業に適切に取り入れていく力が求められる。

「発音」の項目の順位が高いことは注目に値する。アンケート項目の作成にあたって行った現職教員への面接では、「CD から聞こえてくる音と教員の発音がかげ離れていると生徒からなかなか信頼されないと感じます。英語教員の技量の中でもっとも目立つ部分だからでしょうか。」というコメントも聞かれた。これは、教員の発音が生徒の学習意欲にかなり影響を与えているということであり、興味深い。

「新出事項の導入」は教材に対する生徒の興味・関心をいかに高めるかという点に関わっており、筆者の経験上、導入の善し悪しが授業全体に影響することさえある。その重要性は小学校でも同じであると考えられるが、中学校の場合は興味づけとともに定着に結びつけるための効果的な導入が求められる。さらに、中学校では語句や文の表す意味だけではなく、語の形態や句や文の構造など言語の形式的な側面にも意識を向けさせるような導入が求められる。抽象的な文法事項を適切な場面とともにどのように導入するかという点は中学校教員の主要な関心事であったといっても過言ではなく、それだけに長い試行錯誤の歴史がある。そのため、特に中学校ではこの項目の順位が高くなっていると考えられる。

「学習規律」という項目があがっていることも興味深い。小学校においても学習規律を保つことが重要であることは疑いない。しかし、外国語活動の場合には、聞く・話すことを中心に児童が和やかな雰囲気のもとで歌やゲーム等を通して外国語に慣れ親しむというインフォーマルな教室のイメージがあるのに対して、中学校では、読み・書きや文法学習を含めて机について行う活動の割合が多くなるため、よりフォーマルな学習環境がイメージされる。このようなイメージの差が回答に現れているのではないだろうか。

3.3 特に小学校で重視されている項目

パターン C (特に小学校で重視) に分類された項目は表 7 の通りである。

表 7 パターン C (特に小学校で重視) に分類された項目

項目 () は項目番号	小学校 (n=50)		中学校 (n=36)		t	p	小学校 順位	中学校 順位
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差				
(28) 歌・チャンツの活用	1.740	0.600	2.278	0.779	3.618	.001	2	66
(29) 絵本・物語の活用	2.000	0.833	2.611	0.688	3.604	.001	18	74

上記の 2 項目は小学校外国語活動の特徴と言うべき項目である。特に「歌・チャンツの活用」は順位も高く、小学校教員に求められる力としてかなりのコンセンサスを得ているようである。実際に『英語ノート』を見ると、各單元には歌・チャンツが含まれており、児童が英語の単語や表現に楽しく触れることができるように工夫されている。しかし、筆者が参観する機会があったいくつかの授業においては、スピードが速かったり、言語とリズムの相性があまりよくないような場合、児童が「難しい」という反応をする場面も見受けられた。「歌・チャンツの活用」については児童の反応に応じてスピードを調整したり、取捨選択したりする力も必要になるであろう。

「絵本・物語の活用」は、中学校でも様々な物語が教科書に用いられていることを考えれば、必ずしも小学校に限定された項目とは考えられないが、「絵本」という言葉のもつイメージが年齢の低い子どもと結びつきやすいことから、この回答結果につながったと思われる。実際に、『英語ノート 2』の Lesson 8「オリジナルの劇をつくろう」では、「大きなかぶ」が教材に用いられている。『英語ノート』の指導資料に掲載されている年間指導計画では、物語に直接的に言及しているのはこの單元のみであるが、補助教材として絵本の読み聞かせをすることは他の單元における単語や表現の導入にも用いることができる。

3.4 小学校で相対的に重視されている項目

パターン D (小学校で相対的に重視) に分類された項目は表 8 の通りである。

表 8 パターン D (小学校で相対的に重視) に分類された項目

項目 () は項目番号	小学校 (n=50)		中学校 (n=36)		t	p	小学校 順位	中学校 順位
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差				
(2) 学習指導要領	1.980	0.742	1.833	0.775	0.888	.377	17	45
(15) 授業構成員	2.020	0.742	1.722	0.615	1.969	.052	19	33
(16) 教材の応用	1.920	0.752	1.694	0.749	1.375	.173	15	32
(27) ゲームの活用	1.820	0.748	2.111	0.785	1.745	.085	7	60
(53) ティーム・ティーチング	1.740	0.777	1.750	0.649	0.063	.950	3	38
(54) クラスルーム・イングリッシュ	1.900	0.735	1.667	0.586	1.577	.119	12	28
(58) 学習者モデル	1.880	0.849	1.722	0.701	0.913	.364	10	37
(60) 教具・教育機器の活用	1.900	0.735	1.833	0.655	0.434	.665	13	44
(73) 同僚との協力	1.780	0.648	1.639	0.639	1.002	.319	5	23

学習指導要領の理解について小学校教員の意識が高いのは、平成 23 年度から全面实施される新しい学習指導要領において、「外国語活動」が新規に設けられたことで、より注目が集まっていることと関係がありそうである。その他の項目を見ると、小学校外国語活動とそれを取り巻く環境を如実に示している。「授業構成力」や「教材の応用」は、『英語ノート』を児童の実態に応じてどのように活用していけばよいか、授業の組み立てをどのように考えたらよいかなど、新しく導入される領域に対する小学校教員の不安と研修のニーズを反映したものである。「ゲームの活用」は、歌・チャンツや絵本とともに、小学校外国語活動を象徴する項目であり、具体的な指導技術に関する研修の必要性を示唆している。

パターン D の項目の中でも順位が高いのが、「ティーム・ティーチング」や「同僚との協力」といった指導者間の連携協力に関する項目である。実際に、ALT とのティーム・ティーチングにおいては、授業の打ち合わせの時間が確保できなかったり、意思疎通がうまくとれなかったりして、現状に問題を感じている小学校教員も多いのではないだろうか。この項目には、その問題意識が表れていると考えられる。また、新規に導入される外国語活動は、小学校教員にとってこれまで経験のないことであり、どのような授業づくりをしていくべきかについて模索が続いている。新たな指導体制を構築し充実していくためには組織的な取り組みが必要であり、仮に校内に指導的な教員が存在したとしても、協力的な態度で議論と研修を積み重ねていくことが求められる。

「クラスルーム・イングリッシュ」と「学習者モデル」は小学校教員が児童の前で積極的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を見せることの重要性を意識した項目である。外国語活動においてはできるだけ英語で授業を行うべきであるという主張があるが、児童の理解につながらないのであれば意味を成さない。この点、クラスルーム・イングリッシュは、“How are you?” “Good morning.” といったあいさつや、“Stand up.” “Make pairs.” といった指示、“Good job.” “Well done.” といったフィードバックなどが中心であり、授業場面において必要なことばを必要なときに使うという意味では、最も場面に密着した言語使用であると言える。場面に密着した言語使用は児童の理解を助け、理解可能なインプット (comprehensible input) となって言語習得を促進することにつながる。しかし、すべて英語で授業を進めようとするのではなく、少しずつクラスルーム・イングリッシュのバリエーションを増やしていくことが、児童にとっても学級担任にとっても負担が少ないであろう。また、クラスルーム・イングリッシュに限らず、学級担任が積極的に外国語を使う姿勢を児童に見せることは「学習者モデル」としての役割をもっている。ALT とのティーム・ティーチングにおいては、学級担任の「学習者モデル」としての役割はさらに大きくなる。学級担任は児童役となって ALT に話しかけ、様々な活動をやってみせることによって、児童が積極的に ALT に話しかけられるよう支援することができる。ALT 来校時は、できるだけ一人ひとりの児童が ALT と直接コミュニケーションを図る機会を設けるようにしたいものである。

「教具・教育機器の活用」は『英語ノート』の CD-ROM が配布されたことや、これに対応した電子黒板を設置する学校が増えてきていることを背景に、小学校教員が外国語活動を行うときに必要な能力として認知されつつあることを示している。歌やチャンツも音声だけではなく、動画とともに提示されることによって、内容理解を伴った活動になりやすい。動きのある映像は児童の興味を高めることに一役買ってくれるであろう。しかし、写真、絵カード、小物などの伝統的な教具も同様に重要な役割をもっている。小学校教員は一般に教具の活用に優れていると言われており、外国語活動においても同様にこの特長

を活かした授業が行われている。例えば、「フルーツパフェをつくろう」(『英語ノート1』Lesson 6)においては、果物の切り口の写真を見てその果物は何かをあてるクイズをする、あるいは、児童が各自のマグネットボードに絵カードを貼り付けたものを持って、ALTや友達と交換しながらオリジナル・パフェを作る、などの活動ができる。児童が楽しみながら英語に慣れ親しむために、教具を効果的に活用する指導者の力が重要になる。

4. 今後の課題

本稿では、小学校教員と中学校英語科教員へのアンケート調査を通して、外国語活動あるいは英語科教育を担当する指導者に求められる力について、ある程度総合的に特徴を描き出すことができた。今後は、項目の精選やカテゴリーの整理を行い、追調査を行うことで、結果をより確かなものとする必要がある。また、こうして抽出された項目を大学の講義・演習において活かすことが求められる。例えば、小学校対応の科目においては、『英語ノート』などにあるそれぞれの活動の役割を理解するための講義と、その理解に基づいて必要な活動と言語材料を選択・配列し、児童の活動を支援するための補助教材や教具をグループで考えてつくるような演習の機会が必要である。一方、中学校対応の科目においては、小学校で音声に慣れ親しんできた生徒の経験を踏まえて4技能を統合的に指導することや、新出事項(文法・構文など)の導入の仕方、また、定着を促す活動やフィードバックの仕方などへの意識と技能を高めていく必要がある。大学における具体的な授業改善は今後の課題であるが、講義・演習を通してどのような力を身につけることを目指しているのか、シラバスに書いてある目標に学生自身が自覚的になれるような内省ツールとしての項目リストを活用できるよう取り組んでいきたい。

参考文献

- 金谷 憲 (1995) 『英語教師論』 桐原書店
- 小林美代子 (2006) 『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』 (代表者 小林美代子) 科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書
- バトラー後藤裕子 (2005) 『日本の小学校英語を考える』 三省堂
- ACTFL (2002). *Program standards for the preparation of foreign language teachers*. Retrieved June 2, 2009, from <http://www.actfl.org/files/public/ACTFLNCATEStandardsRevised713.pdf>
- Graaff, R. de (Ed.) (2008). *Beroepsstandaarden en registratie in taalonderwijs eindrapportage BiT-project*. Universiteit Utrecht.
- Kelly, M., & Grenfell, M. (2004). *European profile for language teacher education: A frame of reference*. University of Southampton. Retrieved June 2, 2009, from <http://www.lang.soton.ac.uk/profile/report/MainReport.pdf>
- Newby, D., Allan, R., Fenner, A., Jones, B., Komorowska, H., & Soghikyan, K. (Eds.). (2007). *European portfolio for student teachers of languages - A reflection tool for language teacher education*. Strasbourg/Graz: Council of Europe/European Centre for Modern Languages. Retrieved June 2, 2009, from http://www.ecml.at/mtp2/publications/C3_Epostl_E_internet.pdf
- 附記 本研究は、科学研究費補助金 若手研究 (B)「オランダにおける初等学校の英語指導者養成プログラムに関する研究」(課題番号 20730556) の助成を受けて行われた。

付録 アンケート項目及びデータ一覧

番号	カテゴリー	項目	キーワード	小学校 (n=50)		中学校 (n=36)				小学校	中学校	パターン
				M	SD	M	SD	t	p	順位	順位	
1	知識・理解	教育の基礎理論(教育原論、発達心理学、教育制度など)に関する知識	教育学	2.620	0.987	2.056	0.630	3.231	.002	59	52	
2	知識・理解	学習指導要領の目標と内容の理解	学習指導要領	1.980	0.742	1.833	0.775	0.888	.377	17	45	D
3	知識・理解	英語の文法、音声、語法など、言語・英語そのものに関する知識	言語学・英語学	2.420	0.928	1.444	0.607	5.889	.000	49	7	B
4	知識・理解	英米の文学作品(児童文学も含む)に関する知識	英米文学	3.460	1.092	2.806	1.009	2.829	.006	73	75	
5	知識・理解	英語活動または英語科に関わる教育課程及び指導法に関する知識	英語科教育法	2.120	0.849	1.528	0.609	3.575	.001	32	15	B
6	知識・理解	言語習得理論に関する知識	言語習得理論	3.000	1.030	2.167	0.697	4.206	.000	69	62	
7	知識・理解	異文化体験や各種メディア(新聞、テレビ、雑誌など)から得られる異文化に関する知識	異文化知識・体験	2.360	0.776	2.083	0.770	1.636	.106	46	56	
8	知識・理解	各種メディア(新聞、テレビ、雑誌など)から得られる政治、スポーツ、芸能などの幅広い知識	一般的な知識	2.740	0.803	2.417	0.604	2.035	.045	61	71	
9	言語技能	英語を聞いたり話したりする力	英語を聞く・話す力	1.840	0.738	1.194	0.467	4.956	.000	9	1	A
10	言語技能	検定教科書に用いられているような、英語の標準的な発音ができる力	英語の発音	2.340	0.798	1.389	0.549	6.545	.000	45	3	B
11	言語技能	英語を読んだり書いたりする力	英語を読む・書く力	2.460	0.952	1.444	0.558	6.207	.000	51	6	B
12	言語技能	英語で学習指導案を書く力	英文の指導案	3.200	1.212	2.472	0.941	3.007	.003	71	72	
13	指導目標・計画	学習指導要領と学校の教育目標を踏まえて、学習者の実態に応じた指導目標を設定し、指導計画と学習指導案を立案する力	指導目標・指導計画・学習指導案	2.060	0.740	1.889	0.747	1.054	.295	23	47	
14	指導目標・計画	年間指導計画を構成する単元や個々の授業の位置づけを明確にし、全体としてまとまりのある指導計画を作成する力	カリキュラム構成力	2.120	0.799	2.056	0.860	0.357	.722	31	53	
15	指導目標・計画	個々の授業における1つ1つの活動の役割を適切に位置づける力	授業構成力	2.020	0.742	1.722	0.615	1.969	.052	19	33	D
16	指導内容・方法	学習者の実態に即して、(英語活動の場合は)『英語ノート』(英語科の場合は)検定教科書の内容と活動をアレンジして指導する力	教材の応用	1.920	0.752	1.694	0.749	1.375	.173	15	32	D
17	指導内容・方法	学習者の興味・関心に応じて、学習者自身に関すること(好きな食べ物など)や生活場面(地域の特色を生かした題材を含む)に密着した内容を選択して、指導する力	学習者に身近なテーマの活用	2.060	0.620	1.750	0.692	2.179	.032	22	41	
18	指導内容・方法	日本の文化や異文化題材を活用したり、国際交流を行ったりすることを通して、国際理解教育との関連づけを図りながら指導する力	国際理解・国際交流	2.080	0.695	2.278	0.659	1.330	.187	26	65	
19	指導内容・方法	学習者の興味・関心に応じて、他教科の内容を活用して指導する力	他教科との関連	2.420	0.785	2.389	0.871	0.173	.863	48	70	
20	指導内容・方法	英語を聞いたり話したりすることを指導する力	聞くこと・話すことの指導	2.040	0.755	1.444	0.607	3.909	.000	20	8	A
21	指導内容・方法	英語を読んだり書いたりすることを指導する力	読むこと・書くことの指導	2.840	1.017	1.444	0.607	7.935	.000	66	9	B
22	指導内容・方法	4技能(聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと)を適切に関連づけながら指導する力	4技能の統合	2.460	0.885	1.528	0.654	5.349	.000	50	16	B
23	指導内容・方法	英語の発音やイントネーションに学習者の注意を向け、コミュニケーションの中で活用できるように指導する力	発音・イントネーション等の指導	2.300	0.789	1.778	0.637	3.274	.002	40	42	
24	指導内容・方法	学習目標となる語彙や表現を理解させ、コミュニケーションの中で活用できるように指導する力	語彙・定型表現の指導	2.220	0.887	1.667	0.586	3.262	.002	38	26	
25	指導内容・方法	学習目標となる文法項目を理解させ、コミュニケーションの中で活用できるように指導する力	文法指導	2.920	1.140	1.667	0.586	6.651	.000	68	27	
26	指導内容・方法	辞書の使い方を理解させ、実際に学習者に辞書を使わせながら指導する力	辞書指導	3.400	1.178	2.333	0.793	5.016	.000	72	69	
27	指導内容・方法	学習者の実態に即して、ゲーム的な要素を活用して指導する力	ゲームの活用	1.820	0.748	2.111	0.785	1.745	.085	7	60	D
28	指導内容・方法	学習者の実態に即して、歌やチャンツを活用して指導する力	歌・チャンツの活用	1.740	0.600	2.278	0.779	3.618	.001	2	66	C
29	指導内容・方法	学習者の実態に即して、絵本や物語を活用して指導する力	絵本・物語の活用	2.000	0.833	2.611	0.688	3.604	.001	18	74	C
30	指導内容・方法	学習者の実態に即して、外国に実際にあるもの(外国の看板、雑誌、ポスター、商品のラベルなど)を活用して指導する力	外国の風物の活用	2.560	0.837	2.333	0.676	1.340	.184	54	68	
31	指導内容・方法	コミュニケーションにおける言語・非言語(ジェスチャー・アイコンタクト等)の役割を意識づけながら指導する力	言語・非言語コミュニケーション	2.060	0.867	2.139	0.723	0.446	.657	24	61	
32	指導内容・方法	英語を学ぶ雰囲気づくりをする力	ウォームアップ	1.700	0.789	1.583	0.604	0.744	.459	1	19	A
33	指導内容・方法	学習者が興味を持って新しい単語や表現に出会えるような導入を行う力	新出事項の導入	2.160	0.934	1.417	0.554	4.262	.000	36	4	B
34	指導内容・方法	学習者が英語を用いて情報を伝達したり・気持ちを共有したりできるような活動を提供する力	コミュニケーション活動	1.960	0.880	1.500	0.609	2.703	.008	16	14	A
35	指導内容・方法	英語のスピーチや寸劇をさせたり、ポスター制作、物語づくりなどの創作・表現活動を取り入れて指導する力	創作・表現活動	2.600	0.857	2.083	0.732	3.004	.004	57	54	
36	指導内容・方法	学習内容の定着を図るための活動(くり返しやドリル活動など)を提供する力	繰り返し・ドリル活動	3.040	0.968	1.472	0.609	8.566	.000	70	11	B
37	指導内容・方法	学習者の実態に応じた適切な放課後課題(宿題)を課し、補充・発展的な学習を促進する力	家庭学習・宿題	4.120	1.189	2.028	0.696	10.240	.000	75	51	

番号	カテゴリー	項目	キーワード	小学校 (n=50)		中学校 (n=36)				小学校	中学校	バ タ ー ン
				M	SD	M	SD	t	p	順位	順位	
38	指導内容・方法	「自主課題ノート」などを設けるなどして、学習者が自主的に学習に取り組むことができるような課題を提供する力	自主学习	3.940	1.150	2.111	0.747	8.348	.000	74	58	
39	指導内容・方法	個々の授業において、指導目標の達成を旨として有効に授業時間を使う力	授業のタイムマネジメント・コントロール	2.600	0.857	1.722	0.701	5.045	.000	58	36	
40	指導内容・方法	個々の授業において、クラス全体を見渡し、学習規律を保ちながら授業を進める力	学習規律	2.300	0.909	1.472	0.560	5.211	.000	42	10	B
41	指導内容・方法	学習者の英語(外国語)を学ぶ意欲や動機を高める力	動機づけ	1.820	0.774	1.361	0.487	3.366	.001	8	2	A
42	指導内容・方法	学習者が発言や活動のしやすい支援的な教室の雰囲気づくりをする力	支援的な教室の雰囲気づくり	1.760	0.744	1.444	0.504	2.205	.030	4	5	A
43	指導内容・方法	授業の目標(めあて)を学習者に意識づける力	学習目標の意識化	2.140	0.729	1.583	0.554	3.849	.000	33	18	B
44	指導内容・方法	学習者が主体的に授業に参加できるように工夫(クラス全体に対して発問する、個人の発言をクラス全体に返して問いかける、選択肢を示して手をあげさせたりするなど)をする力	学習者に授業参加を促す工夫	2.060	0.867	1.639	0.723	2.378	.020	25	25	
45	指導内容・方法	授業中に学習者の反応を見ながら、指導案を柔軟に扱う力	指導案の柔軟な運用	1.900	0.707	1.556	0.607	2.362	.020	11	17	A
46	指導内容・方法	デモンストレーションをするなどして、活動の仕方について簡潔かつ明確な指示をする力	活動の指示	1.920	0.695	1.611	0.599	2.152	.034	14	21	
47	指導内容・方法	活動に対する学習者の心理的不安を軽減するための支援(グループで考えさせる、ヒントを出すなど)をする力	情意的支援	2.160	0.710	1.667	0.632	3.324	.001	34	29	
48	指導内容・方法	学習者の質問に答えたり、ニーズに応じて必要なリソース(調べ方の指示、参考書の紹介等)を提供する力	リソースの提供	2.760	1.021	2.111	0.747	3.236	.002	63	59	
49	指導内容・方法	学習者同士の関わりやフィードバックの機会を提供する力	学習者同士の関わり	2.300	0.814	1.667	0.717	3.737	.000	41	30	
50	指導内容・方法	一人ひとりの学習者の学習状況に応じて、適切かつ公平に対応する力	個人差への対応	2.200	0.700	1.694	0.624	3.455	.001	37	31	
51	指導内容・方法	学習者の実態に応じて、ワークシート(プリント)などを適切に用いる力	ワークシート(プリント)の活用	2.640	0.802	1.722	0.615	5.753	.000	60	34	
52	指導内容・方法	学習者の年齢と心身の発達段階を踏まえて指導する力	発達段階に応じた指導	2.100	0.763	1.944	0.715	0.958	.341	29	49	
53	指導内容・方法	指導助手(ALT等)と協力して円滑にチーム・ティーチングを行う力	チーム・ティーチング	1.740	0.777	1.750	0.649	0.063	.950	3	38	D
54	指導内容・方法	基本的なクラスルーム・イングリッシュ(指示・励まし等)を使う力	クラスルーム・イングリッシュ	1.900	0.735	1.667	0.586	1.577	.119	12	28	D
55	指導内容・方法	正確かつ適切な英語を用いて授業を行う力	英語を正確・適切に使う力	2.480	0.863	1.750	0.649	4.476	.000	52	39	
56	指導内容・方法	英語そのものについて生徒にわかりやすく説明・解説する力	英語についての説明・解説	2.840	1.076	1.639	0.683	5.893	.000	67	24	
57	指導内容・方法	英語を、日本語や他の外国語と比較することを通して、効果的に指導する力	母語・他言語の活用	2.800	0.808	2.167	0.697	3.794	.000	64	63	
58	指導内容・方法	学習者と一緒に活動に参加し、自ら積極的に英語を使う姿勢を見せる力	学習者モデル	1.880	0.849	1.722	0.701	0.913	.364	10	37	D
59	指導内容・方法	様々な活動に応じて適切な活動形態(一斉、グループ・ペア、個別)(机や椅子の配置等)を適用する力	活動形態	2.040	0.755	1.639	0.593	2.652	.010	21	22	
60	指導内容・方法	各種カード類(絵カード・フラッシュカード)、黒板、CD/DVD、パソコン、電子ボードなどの教具や教育機器を授業の中の適切な場面でも有効に活用する力	教具・教育機器の活用	1.900	0.735	1.833	0.655	0.434	.665	13	44	D
61	評価	学習履歴(ワークシートや活動の記録)をファイルに保存したものを(ポートフォリオ)などを活用して、学習者に自身の学習状況を意識づける力	学びの履歴・プロセス	2.540	0.706	2.083	0.732	2.914	.005	53	55	
62	評価	授業中の学習者の発言・発聲(誤った英語の発音も含む)に対して、ほめたり、修正・訂正したり、即時的かつ適切なフィードバックを行う力	即時的フィードバック	2.120	0.746	1.472	0.609	4.281	.000	30	12	B
63	評価	学習者を観察し、学習者の発言や取り組みの様子から学習の進行状況をとらえる力	授業中のみとり	2.160	0.738	1.583	0.604	3.849	.000	35	20	B
64	評価	学習者の自己評価・相互評価のための場面を設定したり、振り返りカードなどを用いるなどして、授業における達成度を学習者に意識づける力	授業における振り返り	2.320	0.768	1.917	0.692	2.504	.014	43	48	
65	評価	テストや観察など多面的に評価を行うことで学習者の学習達成度を的確に把握・記録する力	評価データの収集・記録	2.820	0.962	1.722	0.615	6.013	.000	65	35	
66	評価	学習指導要領及び学校の指導目標に基づき、学習者の学習達成度を適切に評価する力	学習達成度の評価	2.580	0.992	1.778	0.637	4.560	.000	56	43	
67	評価	様々な評価データを適切に分析し、カリキュラムの改善および授業改善へつなげる力	授業評価・カリキュラム評価	2.560	0.884	1.861	0.639	4.254	.000	55	46	
68	その他	管理職や同僚、保護者等との協力を得て、小学校と中学校の連携(授業公開、情報交換など)に関する取り組みを推進する力	小中連携の取り組み	2.400	0.833	2.306	0.749	0.541	.590	47	67	
69	その他	研修会の企画・参加や自己研修を通して、継続的に英語力や指導力の向上に努める力	研修・指導力向上の取り組み	2.080	0.695	1.750	0.649	2.232	.028	27	40	
70	その他	英語(外国語)を学習する意義について学習者に考えさせ、重要性・有用性を意識づける力	英語(外国語)学習の意義・役割	2.760	0.870	2.111	0.667	3.749	.000	62	57	
71	その他	校内放送や掲示物、英語コーナーを設けるなどして、授業外でも学習者が英語に触れられるような環境作りをする力	学習環境の整備	2.300	0.678	2.500	0.737	1.302	.197	39	73	
72	その他	教師と学習者、または、学習者同士の人間関係づくりをする力	人間関係づくり	1.800	0.606	1.500	0.561	2.336	.022	6	13	A
73	その他	周りの教職員と良好な人間関係を築き、協力しながら教育活動を行う力	同僚との協力	1.780	0.648	1.639	0.639	1.002	.319	5	23	D
74	その他	指導目標、授業計画、指導内容、評価等について保護者に対して適切に説明する力	保護者、地域への対応	2.340	0.593	2.167	0.697	1.242	.218	44	64	
75	その他	英語と英語を母語とする者(ネイティブ・スピーカー)を絶対視することなく、学習者に期待する望ましい価値、態度、行動を示し、それを促進する力	国際コミュニケーションの道具としての英語	2.100	0.735	1.944	0.958	.341	.28	28	50	